

第13回川井記念賞受賞論文

論文名 介護保険制度下における在宅療養者の生命予後に関連する要因
（「厚生の指標」第56巻第2号（2010年2月）掲載）

著者 倉澤 高志(くらさわ たかし)大阪府保険医協会地域医療対策部長

概要

本論文は、介護保険制度が定着した現在の状況における、在宅療養患者の生命予後に影響する要因を検討し、改善するための課題を明らかにすることを目的としたものである。

前提となる調査は、大阪府保険医協会の内科系会員が、2007年3月末日時点で継続的に訪問診療を行っている患者349名（男性35.5%）に対し、死亡を主転帰指標として1年間の追跡調査を行った。ベースラインの患者情報の中で自立度、認知度、栄養状態については介護保険主治医の意見書に準拠して評価し、生死を従属変数、性別と年齢に加えて自立度、認知度、栄養状態、自己負担金の有無、点滴管理、介護保険サービスの利用有無を独立変数としたコックス回帰分析を行った。

分析結果では、疾患別の生命予後の検討で有意に予後不良であることが明らかだった悪性腫瘍のある者を除外して分析を行った結果、生命予後の影響する要因として、単変量解析でも多変量解析においても有意な要因は栄養不良状態であった。また、介護認定を受けている者に限定して栄養状態に影響する介護保険サービスの種類を検討した結果、訪問介護について、女性においてのみサービスを利用するほど栄養状態が改善する傾向が判明した。

これにより医療介護全般を考慮した解析では、在宅療養中の患者の生命予後に最も影響するのは栄養状態であるとし、良い栄養状態を維持するためには訪問介護の利用が必要であるが、自己負担金のために利用率が下がっていることについて何らかの救済策が必要であると示唆している。

講評

「介護保険制度」という福祉的制度と、「在宅医療」という医療との両制度から在宅療養患者の生命予後と関連づけての研究は斬新である。福祉サイドの話題は多いが、医療サイドから介護保険給付費で生活する人の在宅療養患者の生命予後についての視点の変換が非常に新しい。

高齢者の予後における栄養状態の重要性は、多くの研究で指摘されているが、介護保険のデータを使用した点で新しい知見である。

論文で用いられた手法も適切であり、結果も明瞭で評価できる。今後の施策を考えるうえで、栄養状態およびそれに影響を与える要因の重要性を指摘した貴重な論文である。